

平面構成から立体構成への展開

—サリーのデザイン展開の試み—

富田 弘美 山村 明子 齊藤 麻美¹

巻衣の代表例であるインドの民俗服飾サリーに着目して、その設計を立体構成の形式に展開することを試みた。サリーの着装方法は、一枚の布帛を下半身に巻きつけてから、さらに上半身に巻き肩にかける。着装のテクニックを要する衣服形態であるが、スカート部とシャツ部を立体的に設計し、着用することで着装方法の簡便化を図った。また、上下二部の衣服を裁ちわけずに、一つなぎで設計することで生じるドレープの表現を活かし、サリーのデザインイメージを再現した。

キーワード：懸衣，窄衣，サリー，立体構成

1. はじめに

衣服形態をその構成上の特徴から大別するとき3種類に分類される¹⁾。服飾材料である布帛を裁断縫製せず、身体に直接巻く、懸けるといった手法で着装する懸衣の形式、体幹部と上肢をゆったりと包む寛衣の形式、身体のラインに緊密に合わせる形状に裁断縫製された窄衣の形式である。

懸衣の形式は服飾史上においては古代ギリシャのキトン、古代ローマのトーガが顕著な例である。現代社会においては東南アジアや南太平洋域各地に伝わる民族服飾にその例が散見される。例えば、インドネシアのサロンやインドのサリー、タヒチなどの南太平洋諸島のパレオなどである。いずれも細長い長方形の布を巧みに折り畳み、体に巻きつけ、結びあわせたりして着装する。平面の布帛が立体的な身体に着装されたとき、そこにはしなやかな布帛の豊かなドレープが出現する。薄い麻布を用いたキトンは女性の優雅な曲線的な身体にしなやかになじみ、その特徴を際立たせた一方、厚い毛織物を用いたトーガはたっぷりとしたドレープを生み、男性の身体をより一層堂々とした体

軀に引き立てた。

懸衣の形式は、布帛にうまれるドレープが服飾表現からみた長所であるとする、その一方で平面の布帛を身体に形状に応じてその都度形態を整えて着用するという着装のテクニックを要する服飾形態であるといえる。また、現代社会における活動的な生活形態を考慮したときに、動作による着崩れが少ない衣服が好まれ、窄衣形式の欧米型、いわゆる洋服形態が日本をはじめ世界各国での日常的な服装として支持されている。身近な例を挙げれば、寛衣形式の一例である和服も着付けが難しく動きにくいと日常的な衣服としてはあまり好まれていない。同様のことがより着装が安定していない懸衣の形式でもいえると考えられる。

そこで本報では、懸衣の表現要素を生かすとともに、簡便な着装、活動的な服装形態を実現することを目的とする。懸衣のうち、一枚の布帛で全身を覆うインドのサリーに着目し、そのデザインを立体的な構成の服飾に展開することを試みる。サリーを着装した状態を裁断縫製した形状で作出すとともに、サリー本来が1枚の布帛であることを反映させて、一見すると上下二部形式に見える衣服を、上衣、下衣を一つなぎの衣服として構成する。

家政学部家政学科

1 東京家政学院大学家政学部家政学科 (2006 年度卒業)

2. サリーの特徴

インドの民族服飾であるサリーは平均して幅 0.9～1.2メートル、長さ 4.5～11メートルの一枚の細長い布である。着装方法はまず、アンダースカートを着用してから、サリーを腰から下の脚部をすっきり包み隠すように巻きつけ、アンダースカートのウエストにその布端を挟みこむ。さらに反対側の布の先を折りたたみ、左肩から後ろにかける。肩を覆うように着用する場合もあれば、頭部をすっぽりと覆うように着用することもできる²⁾。下半身の前中心の位置には、余分の布幅をプリーツにたたみ、ウエストに挟み込む。それは一見するとタイトフィットしたストレートなスカートのシルエットを形作っているが、歩行時には折り畳まれた布は翻り、優雅な動きを生み出している。

インドでは裁断縫製をしていないことに宗教的な意味を見出しており、無縫衣は清浄を意味している。その反対に縫製したものはタブーの存在であった。それゆえ、本来サリーは直接身につけるものであるが、今日では胸部を覆い隠すチョリー(Choli)をサリーの下に着用している。これは着丈の短い半袖、あるいはノースリーブの、丸襟衿りのシャツ状のものである。

服飾形態がシンプルな代わりに、その布帛の模様表現は多彩で、インド各地方ごとに特色のある染織・装飾技法が施されている。文様織りや緋染め、絞り染め、型染めといった染色技法により、多彩な色柄が織り、染め上げられている。また、刺繍による模様の添加もなされ、金・銀糸やビーズ・スパンコールといったより一層華やかさを加える装飾がなされる場合もある。模様の配置は総模様として布帛全体に配置されることもあれば、サリーとして着装したときに効果的な配置として、布幅の片側にボーダー柄として配置されたり、肩から垂れ下がる手先の位置に配置されることも考えられる。

3. 制作

1) 制作材料

若々しくかつ華やかに装うサリーをイメージして、コーラルピンク色のポリエステルシフォンジ

ョーゼットを8メートル(布幅112cm)を使用した。着用すると肌が透ける薄い素材であった為、アンダードレス用としてキュブラ100%裏地2.5メートルも使用した。装飾要素としては刺繍ミシン(Viking社製Husqvarna)用の金糸のミシン糸及び金、青、緑色のスパンコールを使用した。付属部品としてはスカートのウエスト部にインサイドベルト、開口部に鉤ホック、身頃の開口部と、ドレープの位置を固定する為にスナップボタンを使用した。縫い糸はポリエステル100%のシャッペスパン60番を使用した。

2) 構造設計

構造を検討する上で、考慮したことは次の2点である。第一に、下半身衣の構造は、サリー本来の巻きつける着装方法から、あらかじめインサイドベルトによりウエスト位置を安定させるスカート構成に変更した。裁断する個所を極力減らすことを考え、前、後ろスカートの脇は裁ちわけず、ダーツを入れることで処理した。その他に半身に2本のダーツを入れた。また、サリーは前中心にタックを寄せるが、ギャザーをウエストラインに寄せることにした。素材が薄手のジョーゼットであるため、ギャザーを寄せても不要な膨らみは生じず、ストレートなシルエットを保てた。第二には、上半身に別仕立てで着用されているシャツを一体化させて、スカート部から裁ちだす構造にした。巻きスカート形式とした布端につづけて、上半身に緊密な身頃を裁断した。作図には文化式原型成人女子用を使用し、アームホールダーツとウエストダーツを入れて上半身へのフィット性を高めた。スカートと同様に裁断する個所を極力減らすことを考慮し、前・後ろ身頃の脇の位置は裁ちわけず、ダーツ処理をした。袖部をデザインすると、一つながりの布帛を活かした構造では身頃からの裁ち出しの設計が考えられるが、身体へのフィット性が劣るため、ノースリーブとした。着用の為の開口部は後ろ中心でスナップボタンをつけた。

サリーの巻きつけた布の表現を活かすために、シャツを裁断した布の残りはそのまま肩に回しかけられるように細長い形状にした。図1に各部位の製図と全体の配置図を示す。

3) 装飾

スカートの裾と、肩に回しかける布の片側にボーダー状にミシン刺繻による装飾を配置した。植物の葉をイメージする3種類の模様を繰り返し配置し、その上下を2種類の曲線ではさんだ。(図2)布帛のコーラルピンクを華やかに彩るために、金糸を使用した。さらに光沢を添えるためにボーダーの下に青色のспанコールを一行、また、葉の模様の一部に緑色のспанコールを散らして

配置した。さらに、シャツのウエストラインにも金色のспанコールを一行配置し、着装したときのアクセント効果を狙った。

4) 縫製

縫製には職業用直線縫いミシンを使用した。シャツの襟ぐり、袖ぐりは共布のバイアスで玉縁仕立てにした。また、胸元ドレープ部分の裁ち目とスカートの裾は三つ折り端ミシン仕立てにした。

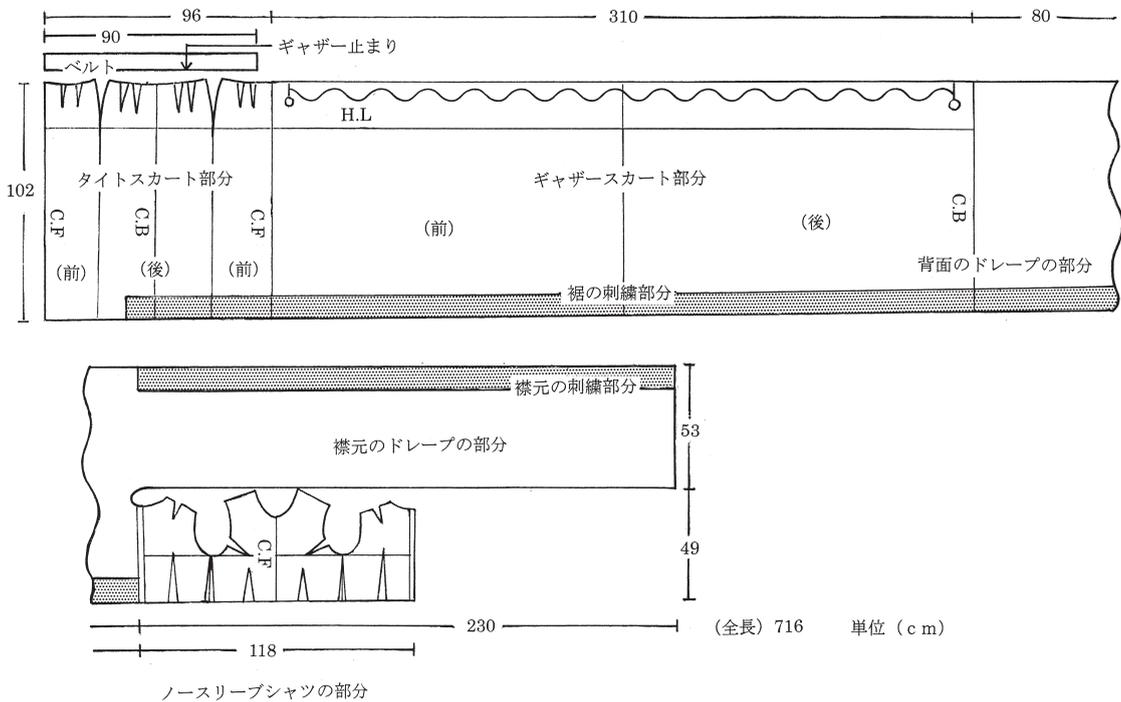


図1 各部位の製図と全体の配置

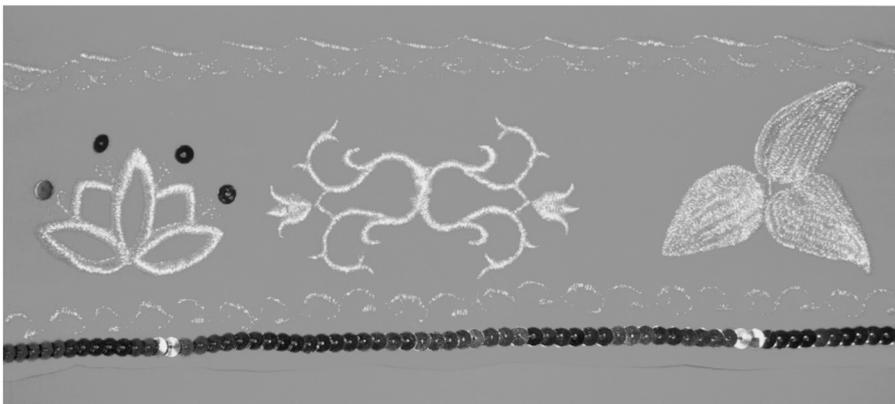


図2 ボーダー状のミシン刺繻

4. 着装

着装の手順は以下のとおりである。まず、アンダードレスを着用した上に、スカートを着装する。前スカートの左半身から後ろスカート左半身にかけてギャザーを寄せた部分が巻きスカートになっており後ろ中心を鉤ホックで留める。(図3)次にシャツを上半身に着用し、後ろ中心をスナップボタンで留める。(図4)ここで布はスカート部から上半身に持ち上げられるため、ねじれながら大きくたわんだドレープが生まれる。(図5)さらに残りの細長い布は腰の位置から左肩に持ち上げられ、胸元にまわし、右肩にかける。(図6)右肩の先の布は自然に背面に垂らす。この場合も腰の位置から肩に持ち上げる布に大きくたわんだドレープが生じる。胸元には刺繍模様ができるよう

に布幅を整える。使用したジョーゼットは滑りやすいのでドレープを安定させるため、肩と襟ぐりにスナップボタンを配し、ドレープが適当な位置に留めた。着装した状態の前後を図7, 8に示す。

本来のサリーは下半身の前中心のタックと胸元を包むブリーツはシャープなラインを表現している。今回の作品はスカートのギャザーや後ろ腰の位置に生じた布のたわみで曲線的な表情が特徴的である。

5. 考察

本来のサリーは一枚の布を巧みに折り畳みながら着装する。そのため、ある場合は身体に緊密な、またある場合はゆったりとしたシルエットがつくりだされ、動作時に揺れ動く布帛の表情

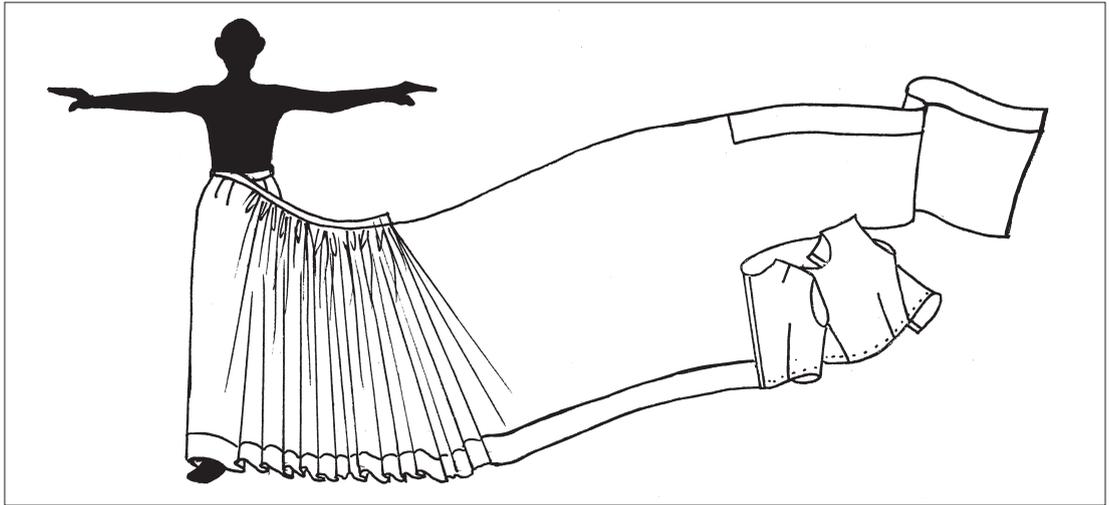


図3 着装手順-1



図4 着装手順-2

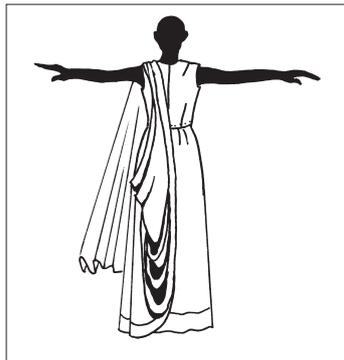


図5 着装手順-3



図6 着装手順-4



図7 着装（前面）



図8 着装（背面）

が魅力的な衣服である。2で述べた、チョリーやアンダースカートを着用した上にサリーを着装する方法は、19世紀後半にイギリス人がインドに入ってきた時期に西洋の道徳観が反映されて素肌の露出を押さえるようになったことと連動している³⁾。身体形状に応じて包み隠すことを目的としたとき、西洋の窄衣形態のシャツやアンダースカートが取り入れられたのである。それは裁ち縫いをしない布を神聖視するサリー本来の意識とは相反するものである。しかし、無縫製の形状のサリーは窄衣の形態との組み合わせという形式により現代の社会生活に適合してきたと言える。20世紀以降、現代のデザイナーはさらなる多様なデザインを試みてきた。1980年代にはデザイナー Zandra Rhodes によりサリーを裂いたり、無造作にあけた穴を散らばすといったことが試みられ、2000年代になるとデザイナー Tarun Tahiliani により短い丈のサリーや、ブラウスとスカートをセットアップしたもの、従来とは異なる巻き方をするもの、表面装飾がよりデコラティブなものなどが提案された⁴⁾。

本報で試みたサリーのデザイン展開は、上下二



図9 Rose of India

部形式の衣服を裁ちわけずに、一つながりで設計したことがこれまでのデザイナーの試みにはない新規のデザインである。結果として巻衣としてのサリーのデザインイメージを損なうことなく、鉤ホック、スナップボタンを使用して着装が簡便になった点、日常動作における活動性も十分である点において、より現代的なサリーとしてデザイン展開ができたと考える。

作品は2007年2月卒業制作発表会、ファッションショー“Around the World”にて作品名“Rose of India”として発表した。(図9)

文 献

- 1) 谷田闕次, 石山彰『お茶の水女子大学家政学講座9 服飾美学・服飾意匠学』(光生館, 1969年), 29-52頁。
- 2) 田中千代『世界の民俗衣装-装い方の知恵をさぐる』(平凡社, 1985年), 38頁。
- 3) 押川文子「写真で見るサリー-1880年代から1940年代」『装うインド FASHIONING INDIA インドサリーの世界』(国立民俗博物館編 2005年), 64-71頁。
- 4) Baner Lee, Daniel Miller "The Sari" (MUKULIKA 2003年), 204頁。

(2007.3.30 受付 2007.5.28 受理)